

武蔵野日曜集会

十字架と聖霊

——ロマ書第8章1～11節——

1996年6月9日(武蔵野)

小池辰雄

信仰なんかない 棄身の愛 霊的な生命 霊音 聖書の筆者の声を聞く 宇宙的なものを相手に 十字架・聖霊不可離の現実 愛霊 聖書を食べる 本当の伝道 一騎当千 キリストに在る者 烈々たる魂

【ロマ8:1～11】

1 この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。² キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。³ 肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。⁴ これ肉に従わず、霊に従いて歩む我らの中に律法の義の完うせられん為なり。⁵ 肉にしたがう者は肉の事をおもい、霊にしたがう者は霊の事をおもう。⁶ 肉の念は死なり。⁷ 霊の念は生命なり、平安なり。⁸ 肉の念は神に逆う、それは神の律法に服わず、否したがうこと能わず、⁹ 然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らはすこと能わざるなり。¹⁰ 然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居らん。キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。¹¹ 若しキリスト汝らに在まざば体は罪によりて死にたる者なれど霊は義によりて生命に在らん。¹² 若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき体をも活かし給わん。

●信仰なんかない

先週の京都特別集会では、もちろん私は全力傾注で告白してきました。

「私には信仰なんかない」

というようなことを私はいきなり言うものだから、何事かとみな思うわけです。「信仰」というのは「信じ仰ぐ」と書く。私は信じ仰いでなんかない。私のは「神交」、神・キリストとの交わりです。神とキリストとは一つですから。キリスト自身が神さまの中に自分を



投げ入れて、

「我を見し者は父を見しなり」

と仰った。だから、我々は

「我を見し者はキリストを見しなり」

と、これが言えなくてはいけないわけです。相対的人間小池の奥に、絶対的な、キリストとの交わりの自分というものがある。クリスチャンは本当に誰でもがその自覚をもたないといえます。いわゆる「信仰」ではない。神交わりです。

「我を見し者はキリストを見しなり」

と、これを本質的には自分の自覚としてもつていなければいかん。キリストを信じているのではない。キリストと、一つになっている。だから、私は「信仰」という言葉は嫌いなんだ。キリストと一如なんです、一体になっている。そういうことをはつきり言う牧師さんがいるかないか知りませんが。それが我々の現実です。パウロはそういう本当の神交の中にいた。だから、パウロは——ローマ書をお読みになると分かりますが——非常に力強い。パウロは何といつても、使徒の中心ですから。キリスト直結です。我々も一人ひとりがキリスト直結です。媒介は何も要らん。聖霊なるキリストだけです。

私は雷みたいな人間だから、京都や大阪のご連中は驚いたかもしれないね。けれども、楽しかったらしい。光がひかるし、霊的な音が響くし、それに乗っかって、私はその時に示されたことを順序もなしに語りますから、みんなおったまげたかもしれない。とにかく、キリストの生命、光、愛、力、それを証して参りました。東京と京都はキリストのお友だちですから、京都に行くときには、どうぞ、万難を排していらつしゃってください。これは霊的な交わりにもなりますから。我々はそういった霊的な交わりをお互いに時には、一年に一度や二度はやること。これは非常に大事なことです。

「小池の話は普段聞いているからいいや」

なんていう、そんな気持ちではないですよ、霊的な交わりのためです。そんなことで、言葉の深い意味で非常に楽しい集会をして来ました。

●棄身の愛

今日の題は「十字架と聖霊」です。なぜ、キリストは十字架に架かったか。十字架になんか架からないで、いきなり天界に行けた方ですけども、わざわざ十字架に架かった。相対的現実としては、キリストを十字架に架けたんだけど、キリストは自ら十字架した。

「己が十字架を負わなければ、私の弟子になることはできない」

とキリストが言われた。我々も十字架を負っている自分でなければ、キリストの弟子ではないと。

「人その友のために」



あるいは「ひとのために」と言ってもいい

生命を棄つる、これより大なる愛はなし」

という。棄身の愛なんです。我々はお互いさま、棄身の愛です。「棄身」というのは素晴らしい言葉ですね。自分を友人のために、人のために棄ててかかっている。これが棄身の愛です。心で愛しているのではない。全存在でもって相手に投げかけている。そういうのが本当の世界なんです。

私がまだ小学校に入らない前に非常に親しい友だちがいました。それとしようちゅう遊んでいた。それと二人で大通りに出たら、大八車がやってきた。カブトムシがその方に向かって歩いてた。私のその友だちは――「ぼんちゃん」というんですが――そのカブトムシを追いかけて行って、その大八車にぶつかって倒れ、後輪に首を引かれて、そこで死んでしまった。悲鳴をあげた、あの悲鳴は今でも私の耳に残っているようなわけです。ちょうどその時、私の兄小池政美が学校から帰ってきたので、それを担いで交番に届けました。あれは全く、結果からいうと、私に対しては棄身の愛なんです。いつまでたつても忘れるわけにいかない。私がもし先に見つけていたら、私が倒れて死んだかもしれない。

キリストは私たちのために棄身の愛です。十字架は棄身の愛です。キリストの霊は、「聖霊」というけれども、本当は「愛霊」なんです。愛の霊です。聖霊というと何か少し冷たい感じがしますが、愛の霊なんです。我々に棄身でかかっている。十字架の贖罪がその棄身の愛です。

●霊的な生命

それから、聖霊です。

「祈って待つていろ、後でお前たちに聖霊をさずける」

と。だから、この十字架の棄身の愛と、今度は、霊的な生命をくださった、この聖霊です。十字架と聖霊は離すわけにはいかない。そういう現実を我々は、聖書の記事としてではなく、我々の現実としてキリストの十字架と聖霊を受けとっていく。

何かお願いするのが祈りではない。そういうキリストの中に自分を入れることが祈りなんです。祈りの世界で本当にキリストと一つになった世界から、今度はその現実から何かお願いしたいことがあったら、お願いしたらいい。お願いの前にその現実に入らなければだめなんだ。

「祈りたることは聞かれたりとせよ」

とキリストが言われるものだから、祈りでよくお願いをするけれども、もつと大事なことはもうひとつ奥の祈りの事態です。

「わがうちに入れ」

ということは、キリストは言っておられないけれども、そういうわけです。パウロなんて



いうのはキリストの中に入っている。

「我を見し者はキリストを見しなり」

と、あなた方お一人ひとりとその自覚に入っていれば、それは力が来る。力が来ない世界は本ものではない。

● 霊音

「福音は言にあらず、力なり」

とパウロが言っている。「エウアンゲリオン」というのは福音よおとずれ音信という意味なんだけれども、これは本当は「福音」ではないんだ、「れいいん霊音」といったらいい。霊の音なんだ、音楽なんだ。ベートーヴェンの第九シンフォニーみたいなものだ。福音の世界は霊の音の世界なんです。聖書の文字の奥に霊の音が響いている。だから、それを身体で聞かなくては。耳で聞くのではない。身体で聞かなければだめなんだ。そうしたら、その人は本当に聖書を読んでいるということになる。とにかく、力が来なかったら、つまらないですよ。私はそうなんだ。私は力がこなかったら、もうやめてしまう。力が来るから、ありがたくてしようがないし、楽しんでしようがない。

「私はいわゆる信仰なんかない」

とはつきり言うから、みんな「何事か」と思うんだね。

「キリストに圧倒されているだけ。キリストの愛に圧倒されて活かされています」

と。本当だから仕方がない。上から力が来ないようなことは、私は自分でやりたくないし、空しいということを知ってますから。

「小池先生はなぜあんなに元気なのか？ 水泳をやっているからか」

なんて、そうじゃないよ、水泳ではない。自分をキリストの中に入れると、キリストの力がやってくる。私はもう年齢なんか超越しています。何歳だっていい。存在そのものをもつてキリストを証しする、我々一人びとりはそういう証人なんです。証者、証し人です。

● 聖書の筆者の声を聞く

旧約の預言者たちはエホバの証し人、新約の使徒たちはキリストの証し人です。旧約では、特にイザヤ書を読んでください。素晴らしいから。預言者イザヤというのは大変なやつだ。イザヤ書は66章あって、聖書66巻のまるで縮図みたいだ。時々、イザヤ書を読んでくださいよ。それから詩篇。しかし、詩篇よりも大事なのはイザヤ書です。預言書というのは、上から来ている神の力、言を受けとって語っている。詩篇はこちらからの祈りなんです。ルターは詩篇を非常に評価したけれども、私はイザヤ書です。旧約のイザヤ書の方がよっぽど凄い。第一イザヤ、第二イザヤ、第三イザヤ、この三人が書いた。これは先生と弟子の関係でしょう。大変なもんだ、このイザヤ書というのは。これは新約聖書のマタイ、マルコ、ルカ、ヨハ



ネの四福音書の預言書といってもいい。

福音というものは語りまた聞く世界なんです。語るも聞くも同じ世界に入るということで、本当は読む世界ではない。聖書を読むときにも、聖書の筆者の声を聞く。その魂と一つになる。そういう角度の読み方をしなければだめなんです。意味の世界ではない。響きの世界なんです。音楽みたいなものです。音楽というのは素晴らしい。意味のない音だけでもって、そこに聞く人に或る意味的な内容まで与える。音楽というものは大したものだね。聖書も実は音楽なんだ、響きの世界です。この響きを全身で受けとる。聖書を読むのではなく、聖書を聞くといい。聞く世界なんです。文字を読みながら、作者の言葉を響きとして聞く。そういう読みかたを本当はしなければいけない。

聖書に限らず、一流の詩の本は——ミルトンにしろ、ゲーテ、ユゴー、トルストイ、ドストエフスキーにしろ——一流の文学は、やはり作者と一つの心になってその世界に入る。そうしなければ、本当に読んでいることにならない。超一流、第一流のものだけしか読まない。二流以下のものは読む必要はない。ダンテの『神曲』は素晴らしい。私はヨーロッパの文学ではダンテの『神曲』が第一だと思っています。地獄・煉獄・天国の三篇を書いた。大変なやつだな、このダンテというのは。

●宇宙的なものを相手に

とにかく、世界的なもの、宇宙的なものを相手にするのが一番いい。日本は太平洋を大きな池としてもっているんだから、時々、海を見るといい。私の伊豆高原の小屋からは太平洋がよく見える。太平洋を眺めていると、非常に気が大きくされて、いいものだ。朝日は上ってくるしね。

「太平洋の波の方にたなびく雲や」

という旧制一高の歌があります。よく私の兄貴が歌っていました。とにかく、雄大な気分にならなければ、福音の世界は本当は読めない。聖書は凄い本だから。

「万巻の書もこの聖書一卷にはとてもかなわない」

とはゲーテの言葉です。聖書ほど力強い、また面白い、楽しい本はない。「聖書はむずかしい」なんて、それは読みかたがまちがっている。ちよつとも難しくはない。そして、自分が感じた所にラインをひっぱって読む。それは響きが来ますからね。私の聖書には方々にラインがひっぱってある。聖書をそのままただきれいにしてあってもだめだよ、破けている所があるくらいでなければ。どうぞ、聖書に本当に親しんで、

「聖書は私が書いた本だよ」

と言うくらいに、親しんでください。



●十字架・聖霊不可離の現実

ローマ書8章に入ります。

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。

はつきりしているね。この文語訳はいい。口語訳はなんだか力がこないで私は嫌いだ。「キリスト・イエスに在る者」というのは、もうキリストと一つになっている者ということです。それは罪に定められることはない。

2キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。

非常に断乎として言ってますね、心配いらんと。

「生命の御霊の法」という。私はここに「十字架と聖霊」と書いた。ひとつは十字架のキリストの贖いです。私の過去・現在・未来の人間小池というやつはもう贖われてしまっている。だからもう、

「ありがとうございます」

と言って平伏して感謝する。そして、

「あなたの生命の霊をいただきます」

と言って、十字架の土台の後からきているところの聖霊をいただく。もう、聖霊をやるうとして、キリストは待っているんだ。十字架・聖霊の不可離のこの現実を受けとったら、

「我はまた何をか望まん」

という。キリストが

「我は地に火を投ぜんために来たれり」

と仰った。ルカ伝12章49節に書いてあるでしょ。これは忘れないでくださいよ。

「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。されど我には受くべきバプテスマあり。

「受くべきバプテスマ」とは十字架のことです。十字架の贖罪をしてから、火を投ずる。聖霊の火のことです。聖霊の火を投ずる。これは聖霊のことです。

その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。われ地に平和を与えんために来ると思ふか。われ汝らに告ぐ、然らず、反って分争なり。」（ルカ12・

49～50）

「私（キリスト）を受けとるか受けとらないかでもって、人間の区別が違ってくる」ということ。

●愛霊

「肉」とは、生まれつきの我々を「肉」という。「霊」というのは、キリストの霊をいただいて、贖罪されていること。生まれつきの我々は皆誰も「罪びと」だからね。



「義人なし一人だになし」（ロマ3・10）

とパウロが言っているとおりで。

「私は何も悪いことをしていないのに、なぜ罪びとなんて言うんですか」

と、普通の常識の人はそういうことを聞く。悪い事をしなくても自己本位が「罪」なんです。自己本位ということが「罪」なんです。神・キリスト本位で——仏教ならお釈迦さん本位だ——それが中心となつて生きてるのが「霊」なんです。「肉」は誰でも生まれつきの我々です。「霊」は新しくキリストを受けとっている——仏教ならお釈迦さんを受けとっている——その世界が「霊」です。

霊にもいろいろな霊がある。悪霊もあるからね、冗談じゃない。

「霊をわきまえよ」

とパウロも言っている。我々にとっては聖霊のキリストです。聖霊は愛の霊です。愛霊と言つてもいい。我々を活かす、生命を与える、それが愛ですから。どんな運命環境にあつても、絶対にそれでへこたれない。それがキリストの愛なんだ。力強い愛です。感情の愛ではない。力を与える、生命を与える愛です。

他の本で聖書のそういう力ある愛を与えてくれる本はない。ダンテにしろ、ゲーテにしろ、ユゴーの『レ・ミゼラブル』にしろ、ミルトンの『パラダイスロスト』にしろ、一流の詩はみんな土台は聖書です。トルストイの『復活』の終りの方のカチューシャのところもいいね。だから、聖書を読むと、私は楽しくてしょうがなくて、ありがたくてしょうがない。

ところが、普通、文学者がそういう境地を知らないんだ。情けなくなるよ。それは結局、大学の先生でも聖書を読まないから。「あつそうか、キリスト教か」なんて言つてね。「キリスト教か」ではない。このキリスト道は一流の文学の根底なんです。そういうことが分かつてない。だから、夏目漱石の文学なんかも力がない。徳富蘆花の中には少しは出ている。蘆花はかなり聖書を読んだから。漱石はだめだね。いわゆる文学としては漱石は一流でしようけれども、漱石の一流とヨーロッパの世界的な文学の一流とはケタがちがう。私も漱石を楽しんで読んでいたことがありますけれども。

内村先生は

「偉大なる文学がいだよ」

と、嘆かれた。内村先生は世を去るときに、

「もう、こんな日本には愛想をつかした。そう言つてくれ。俺はもうたくさんだ」

と言つた。これが遺言ですよ。内村先生も伝道したけれども、さっぱり、本当に受けとる者が少なかったからね。

私も内村先生の話を聞いたけれども、今思うと、まだ聖霊の次元からは、ずれていた。内村先生の書いたものはなかなか力があるけれども。古典的なものです。藤井先生の『羔羊の婚姻』という詩は未完成で終わってしまったって残念だった。賀川豊彦はなかなかいい。賀



川さんのものは大したものだ。やはり賀川さんは苦勞しているから。文も非常に達者です。私は近代の日本のキリスト教界で第一人者は賀川豊彦だと思っています。賀川さんを独訳した本があったな。

●聖書を食べる

「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火、聖霊の火が燃えたら、我また何を
か望まん。されど我には受くべきバプテスマ、十字架がある」
と。だから

「十字架が土台で、それから聖霊をやるんだ」

ということ、ちゃんとルカ伝12章49、50節で書いてある。

それから、ルカ伝13章31節、

『³¹そのとき或るパリサイ人ら、イエスに來りて言う『いでて此処を去り給え、
ヘロデ汝を殺さんとす』³²答えて言い給う『往きてかの狐に言え。視よ、わ
れ今日明日、惡鬼を逐い出し、病を医し、而して三日目に全うせられん。
³³されど今日も明日も次の日も我は進み往くべし。それ預言者のエルサレム
の外にて死ぬことは有るまじきなり。³⁴噫エルサレム、エルサレム、預言者
たちを殺し、遣^{つか}されたる人々を石にて撃つ者よ、牝^{めんどり}鶏の己が雛を翼のうちに
集むることく、我なんじの子どもを集めんとせしこと幾度ぞや。然れど汝ら
は好まざりき。³⁵視よ、汝らの家は棄てられて汝らに遺^{のこ}らん。我なんじらに
告ぐ、「^ほ讚むべきかな、主の名によりて来る者」と、汝らの言う時の至るまで
は、我を見ざるべし』(ルカ13・31～35)

こういう預言をちゃんとしてらっしやる。十字架と復活のことです。14章15節以下も面白いですね。

聖書ほど面白い本はないし、力がある本はない。聖書はあきないです。聖書を柵の上に置いて飾って、ゴミがかかるようなことをしていたら、それはおしまいですよ。御飯を毎日食べます。聖書を食べることを忘れたらだめなんだ。霊の糧^{かて}を食べることを忘れたらだめです。一章でもいいから、毎日、朝か晩か読まないと。聖書を読まないと寝られませんかというのが本当だ。なんでも実行しなければだめです。何か読んでいて面白くないと、今度は聖書を開く。そうすると力がくる。そして、読んでいた本に逆に今度は、読みながらその本の内容に力を与えてやる。

●本当の伝道

私の兄貴の小池政美は——私は中学生のときに、兄貴は一高の生徒でしたが、兄貴と机を並べていた——いつも聖書を机の右側に置いて、それを必ず読んでいた。そして、読ん



では縁側に出て祈っていた。私には、キリスト教のことは何も言わなかった。そういう姿を今でもちゃんと覚えています。今思うと、その姿が私への本当の伝道だったね。だから、私には聖書への第一恩人は、何も言わなかったこの兄貴なんです。兄貴はロンドンへ行くはずだったのを、上役の野郎が自分の子分をロンドンにして、兄貴を北京に回した。中国はその頃、衛生が悪かったから、北京で腸チフスにかかって仆れた。そんな早死で、27歳で仆れるような兄貴でなかったんです。だから、私の生涯はこの兄貴の復讐戦なんです。何もものかに向かったの復讐戦です。ダンテが「自分の『神曲』は復讐だ」と言った。そういう聖なる復讐です。

あなた方もいろいろな経験や課題がありでしょうが、勇ましくやってくださいよ。福音を受けている者は必ず戦いがある。その戦いをしなかったら、福音を受けている人でなくなってしまう。あなた方一人ひとりが伝道者なんです。おりがあれば人に、

「聖書を読んでごらんさい」

と、或は聖書の一文を語ってやる。

「へえー、そういう本があるんですか」

なんてね。けれども、一般の本屋には聖書売ってない。だめだね。特定の本屋でなければ売ってない。聖書というのは世界的な本です。世界的な本をいいかげんにしている。ユダヤ人の、イスラエルの本ではないんだ。「聖書」なんて言わないで、「万人の書」とか「万国の書」とか、何か別な名前にしてもいいくらいだ。「聖書」なんて言うのもったいぶってしまつてね。

●一騎当千

「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の聖霊の火燃えたらんには、我また何を
か望まん」

と。平和ではない、戦いだという。それは、キリストはこの神の真理に対しては激しいですから。いい加減なクリスチャンが多いから、いやになつてしまうな。この武蔵野幕屋の方々は一騎当千で、一人で千人を相手にすることができる、そういった烈々たる魂でいいよあつてください。ジャンヌダルクのようにね。ジャンヌダルクという女性は素晴らしい。あれは田舎の百姓の娘だよ、それがイギリス軍を相手にして戦った。しまいに捕まって、火刑に処せられた。ひどいもんだね、火あぶりなんかにしやがって。天の一角を望んで火に焼けながら、彼女は天界に行つてしまった。

まあ、21世紀はどういうことになるんだかね。1999年というのは何かちよつとおかしな年になりそうだな。とにかく、戦つていきます。あなた方も大いに一緒に戦つてください。武蔵野幕屋はもの凄い神・キリストの力に溢れている幕屋です。太陽の光よりも、この部屋の方が本当の光をもっている。そういうあなた方は大事な方々だと、私は感謝いたします。



●キリストに在る者

ローマ書8章にもどります。

1 この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。

キリスト・イエスの中に捕まって、その中に在る者はもう罪から逃れている。

2 キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。

これは力強いね。もう死なない。キリストと一つですから。キリストを「信じて」いるのではない。

「キリストに在る」

という言い方は非常に力強い言葉です。ギリシヤ語で「エン・クリスト」という言葉です。

「キリスト・イエスの中に在る者は罪に定めらるることなし」

ということです。「ないであろう」なんて言っていない。ローマ書を書いた使徒パウロというのははっきりしている。口語訳聖書だと、力がなくてだめです。文語訳でお読みなさいよ。私は口語と文語を混ぜたような文体で新約聖書を、いつかできたら、訳したいと思っていますくらいです。

6 肉の念は死なり。霊の念は生命なり、平安なり。

「肉の念」は、即ち生まれつきの自分という者の思いは神に逆らう、

7 肉の念は神に逆う、それは神の律法に服わず、否したがうこと能わず、

また生まれつきの我は、

8 また肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。

その通りです。要するに、聖霊がこなければだめなんです。このことはマルティン・ルターが口をきわめて言っている。ルターはやっぱり本当に宗教改革者だね。

9 然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。

キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。

聖霊のない者はクリスチャンとはいえない。

10 若しキリスト汝らに在まば体は罪によりて死にたる者なれど霊は義によりて生命に在らん。

「霊は義によりて生命に在らん」ではなくて、

「霊は義によりて生命にある」

です。

11 若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき体をも活かし給わん。

ここも、「活かし給わん」ではなくて、



「汝らの死ぬべき体をも活かし給う」

です。私は「たまわん」という言い方は嫌いなんだ。「たもう」でいい。断定して言った方がいい。

「そうか、活かさないこともあるだろうか」

なんて、そんな可能性ではないんだ。本当の福音の真理の世界は、すべて断定なんです。過去のことも未来のこともみな現在の現実として受けとっていく。そして、直ちにその現実を受けとる。だから、読んでいて力がくる。読んでいて、力が来ないような読みかたをしていたらだめなんだ。意味ではないですよ、生命的な響きの世界です。「これはどう解釈するか」なんて、一生懸命で「聖書研究会」というのをよくやっている。ご苦労さんなはなしだ、くたびれてしまう。研究ではないんだ。

●烈々たる魂

私は本当にテレビで一席やりたいね。聖書はいかに読むべきものであるかと。

「小池なんていうのは専門家でも何でもないではないか」

と、すぐそういうような言い方をする。いわゆる専門家よりも、天来の響きをもっている素人の方が本当なんです。いわゆる専門家というのはだめなんだ。皆さんも、そういうわけで、一人びとりが権威のある人なんです。聖霊でもって、十字架・聖霊で聖書を読んでいる人は権威をもっている。あなた方はそういった権威のある人ですから、遠慮は要らんです。

ウィリアム・ブレイクのこういう英語の詩の文句があったね。

To see a World in a grain of sand,

And a Heaven in a wild flower,

Hold Infinity in the palm of your hand,

And Eternity in an hour.

一粒の砂の中に 世界を観る

一茎の野草の中に 天を観る

君の手の掌に 無限をつかみ

一刻の中に 永遠を持つ

これは素晴らしい言葉だ。福音の世界を持つている者は、このブレイクの言うような境地がよくわかります。

「野草の中に天を観る」

というのだから、いいね。

まだまだ、私はやる必要がありますから、簡単に向こう側にいきません。まだ92歳だ。百歳を突破するつもりだから。どうぞ、皆さんも烈々たる魂で進んでいきましよう。

